ぼくたちの洋行

遠藤周作

遠藤周作

ぼくたちの洋行

1975年5月28日　第1刷発行

著　者　遠藤周作

発行者　野間省一

発行所　株式会社 講談社

東京都文京区音羽2—12—21　郵便番号 112

電話東京(03)945—1111(大代表)　振替東京3930

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　大製株式会社

定価はカバーに表示してあります

© 遠藤周作　1975年

(落丁本・乱丁本はお取り替えいたします) Printed in Japan (文1)

目
次

入営の日 7
ぼくたちの洋行 29
あわれな留学生 45
父親 67
ピエタの像 87

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

弟と犬と　117
終戦記念日　139
ナザレの海　165
鏡　185
老いの岸辺　195

装幀　福島誠

ぼくたちの洋行

入営の日

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

岡崎英次が学徒兵として令状を受けながら、入営を拒否しようかと思ったのは昭和二十年の三月のことだった。

入営を拒否すれば、勿論、死刑に処せられる。そのことは火を見るより明らかだった。しかし、あの日にふと、思いついた方法はもし成功さえすれば、戦場で死ぬことも、噂に聞いた内務班の地獄のような生活からも免れることができるかもしれなかった。

だが、この方法は前から彼がゆっくり考えぬいたことではない。むしろ岡崎自身は、同じ下宿の、同じ大学の、学友、若林よりも一種、運命を背負うような諦めに似た気持で、令状のくるのを毎日、待っていたのである。

その冬はいつもより殊更に寒かった。火鉢に入れる炭や煉炭の配給も、この世田谷区では途切れがちになっていたし、それに食糧は極度に欠乏していたが、寒さはこのためだけではなかった。毎日の空襲で次第に蚕食されていく東京のなかで、まだ彼や若林が一間を借りている経堂町はどうにか焼け残っていたが、その町も死にたえたように暗く、人影がなかった。どの商店もほとんど戸をとじ、休業のはり札を出し、あるいは店の片隅に役にもたたぬ一握りの品物を並べているにすぎなかった。空は古綿色にくもり、道には時々、防空頭巾をかむってゲートルをまいた人が通りすぎる以外は寂寞としている。

岡崎と若林は毎朝、暗いうちに小田急に乗り、川崎の軍需工場に勤労奉仕に出かけた。大学の帽子こそ頭にかむっていたが、実質的にはほとんど授業はなかった。夕暮遅くまで労働をして、寿司づめの電車に乗って戻る。空襲警報や警戒警報があると、その電車は途中でとまる。時には一時間も二時間も人いきれと汗の臭いの充満した車内で直立しながら警報の解除を待つこともふしぎではなくなっていた。

にもかかわらず、若林も岡崎もこの東京の学生生活を捨てて入営することを怖れていた。

「俺たちは、死んだも同然や、みい。この町を……」

ある夕暮、やっと経堂駅にたどり着き、芯の芯まで疲れ果てた足を曳きずりながら下宿に戻る途中、若林が急にそんな言葉をもらした。

「どの家も死んでいる。死の臭いが家にも路にも漂うとると思わんか」

「うん」

岡崎は肩にかけた救護袋から、一握りだけ残った大豆を口に入れながらうなずいた。

「なあ、お前、国というものをどう思う?」

「国?」

「俺には」若林は声をひそめて言った。「国というもんがようわからんのや。国とは一体なんやろなあ。正直いって俺には……愛国心なぞ、ひとかけらも、あらへん」

「しッ」

岡崎は若林を制し、思わずあたりを見まわした。もし、誰かに聞かれたら——私服の憲兵でなくとも、通行人の誰かの耳にこの若林の不用意な一言でも耳に入ったならば、どういう結果にな

るかは火をみるより明らかだった。

「そう言うけどなあ、国というもんは、みんなのイヤがることを強制する集団やないやろ。俺は戦争に行くのはイヤや。俺のお袋かて、俺を戦争にやることを悦ぶ筈はない。お国のために息子を捧げる軍国の母の談話なんて、どんなに偽善なもんか、誰かて心のなかでは知っとるわ。それを口に出して、よう言わんのは、ただ監獄に入れられるのが恐ろしいためや。俺には愛国心なんて、これっぽちもないのや」

「やめんか」

「ああ……」溜息とも吐息ともつかぬ声をだして若林は呟いた。「ながいなあ。この長い、長い、戦争、いつ終るんかなあ」

戦争が終るのはそう遠い先ではないという予想が岡崎にはあった。誰一人、そんなことを語るものはなかったが、しかし誰もがそれとわかるような状態が毎夜、毎夜のB29の空襲で東京に繰りひろげられていたのである。

工場からの帰途、二人は路で自転車に乗った男が彼等の下宿に向っているのを見ると、体をビクッとさせて立ちどまった。怖れている令状が今、その男の手によって配達されたのではないかと思ったからである。

「大丈夫やった……。通りすぎたで」

自転車が下宿の前を通過して、鈍い軋(きし)んだ音をたてながら、人影のない灰色の路のむこうに去っていくのを見ると、若林も岡崎もホッと安堵(あんど)の声をだすのだった。しかし安心はできなかった。彼等の大学でも昨日はA、今日はBというように、まるで杭をひき抜くように学友の誰かに

令状が舞いこんでくるのだった。遅かれ、早かれ、自分たちの手もとにもあの召集令状が区役所から届けられることはわかっていても、今日一日が救われたという気持は切実だった。

ある日の午後、珍しく早く勤労奉仕から解放された二人が下宿に戻ってみると、玄関が固くしまっていた。

下宿はむかし役人だったという人に死にわかれた母と娘とがやっている家である。配給物をどちらが取りに出かけたとしても、伝言か書きおきが玄関の戸にはさんである筈だったがそれもなかった。

裏口にまわってみると、勝手口の硝子戸があいていた。

「美和ちゃん、出かけたんかいな。泥棒に入られまっせ」

おどけた若林は口に手をあてて下宿の娘の名を呼んだ。しかし、ひえびえとした家の中も残雪が黒ずんで残った小さな庭も凍ったように静まりかえっていた。

二人は二階の自分たちの部屋にのぼり、赤茶けた畳の上に腰をおろして、ゲートルをときはじめた。その時、階段にかすかな物音がして、娘の美和子が姿をあらわした。モンペをはいて防空頭巾を片手に持ったその顔は真青だった。

「来たわよ」

聞きとれぬほど小さな声で彼女は言った。

「来たわよ」

「なにが」

「令状よ」

若林と岡崎とは思わず顔を見あわせた。咄嗟にこの二人の頭に共通してのぼったことは、その令状は自分に向けられたものだという確信と、それから深い穴に滑り落ちていく時のような眩暈に似た感情だった。

「俺、にか」

若林は膝を畳につけたまま、伸びあがるようにして美和子を仰ぎみた。美和子は美和子で柱に軀を靠れさせたまま、怒ったように二人を見おろしていた。

「それが……わからないの。あたし、配給物とりにいっている間、令状が来て、母さん急いで駅前の公衆電話にいったらしいの」

「うん、それで？」

「あたし、隣の和田さんにそう聞いたもんだから駅まで自転車で飛んでいったんだけど……母さんとすれ違ったのよ」

「俺やな、俺に来たんや」

放心したように若林は畳の上に横ずわりになった。

「なんで……俺とこみたいに、母一人、子一人のとこに令状なんぞ、寄こしよんのや。俺はイヤや。絶対にイヤや」

壁の一点を見つめたまま、若林は小さな声で呟き続けた。

「いや、お前じゃないだろ」岡崎は首をふった。「赤紙の宛名は僕だよ。そう、前から思ってたんだ。僕にきまってる」

「ふん、俺やないかな。そうかもしれん、俺とこは母一人、子一人やさかい、そう早うは令状も

送らんやろと伯父貴も言うとったし……」

急に若林は今、運命のきまったのは自分ではなかったように笑顔をつくりだした。まるで笑顔をつくり、友人を慰めることによって自分の運命を否定するようだった。

「なあに。岡崎、くよくよすんなよ。内務班言うたってまさか殺されはせんやろ。教育期間が一年かかるやろうから、そのうちに、きっと戦争かて、終るさかい。それに……」

彼が言葉を言い終らぬうち、勝手口で下駄の音がした。ころぶように美和子が階段を駆けおりた。

「母さん?」

「あっ」

「どっち。どちらに令状が来たのよ」

「若林さん」

押し殺したような母親の低い声を岡崎と若林とは階段の中途で、棒立ちになったまま聞いた。

三日後の夜、下宿の隣組の人たちが集まって若林のための形ばかりの送別会を開いた。令状がきた者には町会から一升の酒や特別配給のするめが配給される。和田さん夫婦や在郷軍人会の柴崎さん、それに警防団で散髪屋の田中さんもわずかな酒を暗幕のはった部屋で飲んだ。

「なあに、銃後の護りはねえ、安心して田中に委せて下さいよ」

田中さんは自分の酒を若林につぎながら、しきりにこの言葉を繰りかえした。警戒警報のなかの送別会だったから、大声一つたてられず、酒も尽きると皆は白けた顔をして、するめをかじっていた。そんなみんなのなかで美和子だけが怒ったように岡崎の顔を見つめていた。だが会の中

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com